

複式学級における、ICT機器を用いた外国語科学年別指導の充実 ー自己フィードバック法を用いた間接指導の可能性ー

菅原 純也・遠藤真央・小田誠・伊藤雅子・久慈美香子・白間勇輔・

大森有希子・遠藤勇太・檜木航平*，ホール・ジェームズ**

*岩手大学教育学部附属小学校，**岩手大学教育学部

(令和4年3月14日受理)

1. はじめに

小学校外国語科は、5年生から6年生へと系統的な内容になっている。5年生で学習した内容を基盤とし、6年生では、より自由度のある英語運用の中で、コミュニケーションを図るための基礎を育成している。

このようなつながりの中で、複式学級における同内容指導(異なる学年の児童に対して同じ内容を指導する方式)では、5年生において6年生内容から始まる場合、大きな負担となることが予想される。

複式学級の多い岩手県では、多くの学校が外国語科の指導を同内容指導で行うか、学校内操作による担任外や他学年の先生による指導が行われている現状がある。この方法だと、転出入に伴い、未履修の可能性も示唆されたり、担任外への負担が増えたりするという課題も残る。

同内容指導とは別に、学年別指導(異学年指導)がある。これは、異学年がそれぞれの学年内容を学習するものであり、複式指導においては一般的な学習形態となる。この学び方は、直接指導、間接指導に分かれ、教師が「わたり」と言われる学年間を行き来する教授行動を用いることにより、それぞれの学年指導を行っている。教師と共に学ぶ場合を「直接指導」、児童だけで学びを進める場合を「間接指導」と呼んでいる。

直接、間接が生まれることが学年別指導のよさでもあり、課題でもあるといわれている。特に、間接指導において、友達同士の関わりが単学級よりみられる反面、児童の学びを円滑に進めるための、手立ての充実に大きな課題が見られる。

その、手立てのひとつとして考えられるのが、I

CT機器の活用である。

「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～(文部科学省)」では、次のように述べられている。

「1人1台端末環境は、もはや令和の時代における学校の「スタンダード」であり、特別なことではありません。これまでの我が国の150年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のICT教育を取り入れ、これまでの実践とICTとのベストミックスを図っていくことにより、これからの学校教育は劇的に変わります。(文部科学大臣メッセージより)」

間接指導において、教師の代わりにICT機器を用いながら、学びを進めていく姿に、前述のこれまでの実践とICTとのベストミックスの姿が浮かんでくる。しかし、教師の代わりとなるAIのような仕組みは、いまだ構築できていない現状もある。その代わり、発音や表現を自ら学ぶことのできる映像システムが教科書に掲載されており、自己で学びを進めることできるようになっている。また、自己表現を録画し自らの発表を振り返ることのできるフィードバック法も提案されている。

そこで、本プロジェクトでは、小学校複式学級における外国語科の学年別指導法の中での間接指導の充実を図る手法の1つとして、映像フィードバック法を用いた指導の有効性を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

岩手大学教育学部附属小学校複式学級5・6年かつら組において授業実践，アンケートによる量的・質的検証を行う。

児童には，次の3つの方法で同一課題に取り組み，練習を通して感じたことをアンケート記入させた。

- ア 友達の前で発表し，友達からアドバイスをもらう。
- イ 自分の発表を録画し，自分だけで繰り返し視聴し練習する。
- ウ 自分の発表を録画し，友達と視聴しアドバイスをもらう。

また，アンケートの項目は次のとおりである。

- ①学年
- ②英語の学習歴（習い事）
- ③複式授業の実態
 - ・直接指導，間接指導のよいことや困ったこと
 - ・複式指導における関わりについて
- ④複式学級における外国語科の学びについて
 - ・同学年指導，異学年指導
- ⑤間接指導における自己の英語表現を高める方法について
- ⑥3つの方法における取組方について
 - ・取り組みやすさ，手軽さについて
 - ・表現力の高まりについて
 - ・間接指導に適しているものについて

3. 結果

(1) 単元名

5年「lesson 6 This is my hero.」

6年「lesson 6 My summer vacation.」

(2) アンケートから

①複式指導の実態

○直接指導のよさ

- ・詳しく指導してもらえる。
- ・少人数だから，すぐ聞くことができる。
- ・考えを深めることができる。
- ・みんなでいろいろな意見を出して，自分の意見をよりよくできる。

をよりよくできる。

- ・先生や友達と詳しく学習できる。

○直接指導の困ったこと

- ・自分のペースではいけない。
- ・友達のペースについていけない時がある。
- ・時間が短いので，深く考えることができない時もある。
- ・友達と深く共有できない。
- ・自分の考えを発表できる場面が限られる。

○間接指導の良さ

- ・わからない時にゆっくり確認できる。
- ・一人で考えられる。
- ・自分の力で何かを行ったり，自分でよく考えたりすることができる。
- ・自分の考えを深くする時間的な余裕がある。
- ・自分で学習する力が高められる。
- ・友達の考えが聞ける。
- ・先生がいない状態で，友達だけで考えを伝えあったり，アドバイスをしあったり，気軽にできる。
- ・友達と交流することができる。
- ・自分たちだけで考えたり，話し合ったりすることができる。

○間接指導の困ったこと

- ・時間が短くなった時，急いでしまう。
- ・わからないところが先生に聞けない。
- ・みんながわからないことは，間接指導が終わるまでわからない。
- ・やり方がわからない時がある。

②複式学級における外国語科の学びについて

設問：複式学級での英語学習は，自分の学年の内容を勉強するほうがいい。

はいと答えたわけ（10人）

- ・自己の成長を感じられる
- ・学年に合った学習をしたい
- ・この学年で学ぶことを身に付けることができるから
- ・5年生が6年生の内容をやっても，うまく学ぶことができないから
- ・いきなり6年生の内容をやっても，5年生で習

- うことが分からなければ、難しい。
- ・新しいことを覚えられず、中学校に行ったとき困ってしまう。
- ・6年生の学習には、5年生で習うことも入っているから。
- ・今の自分に合っているから。
- ・6年生の内容を学習すると、覚えるまでに時間がかかり他のクラスより遅くなるから。

いいえと答えたわけ（5人）

- ・5年生で6年生の英語をやったとしても、予習になるし、学年が違うことも勉強になるから。
- ・自分の学年にとらわれずに他学年のものもやっていいと思うから。
- ・自分が習っていない単語を調べるきっかけになるから。
- ・学級全員で学習する方が、時間をより効率的に使うことができるから。

③間接指導における自己の英語表現を高める方法について

次のア、イ、ウの項目について、よさ、課題をそれぞれ記述させた。

ア	友達の前で発表し、アドバイスをもらう。
イ	自分の発表を録画し、自分だけで繰り返し視聴し練習する。
ウ	自分の発表を録画し、友達と視聴しアドバイスをもらう。

ア	よさ	<ul style="list-style-type: none"> ・練習回数を多くできる。 ・声量が分かる。 ・友達の真似ができる。 ・相手を見て話すことができる。 ・すぐアドバイスしてもらえる。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自分では観ることができない。 ・人前で話すので、緊張する。 ・1人ではできない。 ・自分の成長を比較できない。
イ	よさ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のペースで学習できる。 ・修正点が分かりやすい。 ・自分で課題を見付ける。

		<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し自分の発表を見る。 ・練習量が多く取れる。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・アドバイスがもらえない。 ・自分だけでは気付く。 ・友達のよさが分からない。 ・自分だけでは、うまくなれない。
ウ	よさ	<ul style="list-style-type: none"> ・アドバイスがもらえる。 ・修正点が分かりやすい。 ・相手の意見を聞くこと。 ・友達と一緒に改善点を見つけることができる。
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取りにくい ・時間がかかる ・練習量が少ない ・声量が分かりづらい ・友達とみても気づけないことがある。

④複式学級における効果的な児童について

③で示したア、イ、ウの3つの方法について、以下のA、B、Cの視点で選択し、その理由を記述させた。

A 取り組みやすさ、手軽さについて

児童の学びにとって、複雑で説明が多い活動はそれだけで、飽和状態になり実際にねらった学びに至らないことも見受けられる。そのためには、誰もが簡単に取り組めるものでなければならない。特に、間接指導では、教師が不在のため、自分たちで進めなければならない。そのため、簡便かつ手軽の方法が望ましいと考えて設問を作成した。

B 表現力の高まりについて

外国語科の話すことにとって、他者に自分の考えを伝えることは、身に付けさせたい力の中でも大切にしたい要素である。英語科の本質に迫るために、自己を高める練習につながるかについての設問である。

C 間接指導に適しているものについて

複式指導において、間接指導の充実こそが学びそのものの充実につながることは、先行研究からも明らかになってきている。児童の側に立って考えた際に、どの形式が適しているのかを明らかにするため

の設問である。

以下がアンケートの結果である。

	ア	イ	ウ	計 (人)
A	4(27%)	8(53%)	3(20%)	15
B	6(40%)	1(7%)	8(53%)	15
C	6(40%)	6(40%)	3(20%)	15

4. 考察

(1) 複式指導の実態について

①直接指導について

直接指導のよさは、少人数の中で、自分の考えを发表或し、友達の考えを聞いたりする中で、学びを深められるところにある。通常学級においても同様のことが挙げられるが、少人数ならではの距離感の近さによさを伺うことができる。

例えば、教師の目が行き届く物理的な範囲において、詳しく指導されることが距離感の近さとして挙げられる。短い時間ではあるが、直接教師と関わることでできる時間に対して、児童は好意的に感じていることが伺える。また、複式学級は少人数の濃密な仲間関係において、通常学級より自分をさらけ出すことができる環境にある。そのため、失敗を恐れずに自分の考えを主張することで、表現力を高めることができると考えている。

他方、指導時間が短い分、児童の能力差に応じて、ペースが合わないという記述も見受けられる。通常学級であれば、教師とともに考えを深める場面は45分の中で十分確保できるが、複式指導においては20分程度になる。その中で、児童が深く考えるためには、的を絞った指導が必要となる。指導時間が短い分、学習のペースが早くなったり、ペースが早くなることで深く共有できなかつたりと感じていることが伺えた。

②間接指導について

間接指導のよさについて、多くの児童が時間的な余裕を挙げている。課題に対して、じっくりと向き合いながら考えを深められることや、自分たちで解決しなければならない場面では、仲間と考え合わせながら学びを作ろうとすることなど、協働的な学びの場としても有効だと捉えている。友達との学びの

中で考えを深めたり、説明の力を高めたりと、思考力・表現力・判断力等を育む場面としても有効である。さらに、自分たちの力だけで、なんとか課題を解決しようとする態度は、学びを調整したり、諦めずに学びに向かったりする力なども育む場となっている。

他方、自分たちだけでは解決できない課題に対し際には、学びが停滞してしまうことも示唆している。教師が、子供に与える課題のバランスが重要であり、間接指導の充実を図る上では大切したいポイントでもある。

(2) 複式学級における外国語の学びについて

本学級においては、3分の2の児童が、同学年異内容を肯定的に捉えている。特に、5年生の児童は、全員が、肯定回答となっている。

6年生の教科書は、5年生の学習内容が基礎となり、その発展的な内容となっている。言い換えれば、5年生の学習内容の定着がなければ、6年生は難しい。アンケートでも、「学年に合った学習をしたい」「この学年で学ぶことを身に付けることができるから」など、学年に応じた学びの大切さを感じている。

また子供たちは、「5年生が6年生の内容をやっても、うまく学ぶことができないから」「いきなり6年生の内容をやっても、5年生で習うことが分からなければ、難しい」など、学びの系統生について言及している。教科として初めて学ぶ5年生にとって、6年生の内容は大きな壁として受け取っていることが分かる。また、教科書を用いての学びも初めてであることから、安心して学ぶことのできる異学年内容の方を支持しているのではないかと推察する。

(3) 複式学級における効果的な指導について

①間接指導における自己の表現を高める方法について

ア「友達の前で発表し、アドバイスをもらう」について

この方法は、今までの英語学習の中だけでなく、小学校の学びの中で発表を行う際に繰り返し取り組んできた方法である。特別な機器を用いることも

なく簡易・簡便な方法といえる。友達からの即時のフィードバックが可能なおうえ、実際の発表場面と同様の形式で発表ができるメリットがある。

他方、ICT 機器による録画により、自己フィードバック法が定着してきていると、自己の映像を見ることができないことに対して、不安を感じる児童も出現した。また、一人ではできないため、間接指導における、個人での取り組みの際には、取り入れることができない。

イ 自分の発表を録画し、自分だけで繰り返し視聴し練習する」について

この方法は、自分のペースで取り組むことができ、間接指導に適している方法だと児童は捉えている。自分で撮影した画像を繰り返し視聴することで、自己課題を発見し、学びを調整しながら表現をブラッシュアップすることができる方法だと考えている。また、自分だけの活動のため、繰り返し練習に取り組むなど、練習回数を確保できるところにメリットを感じている児童も多い。

他方、友達との関わりがないことに不安を抱えている児童も存在する。その理由として、「自分だけでは気がつかない課題があるのではないか」「自分だけでは上手くなれない」等の回答に現れている。このことから、活動の始めの方で、児童全員が同一の内容など、定型表現の習得において、自己の基礎力を高める間接指導の方法として、適していることがうかがえる。

ウ「自分の発表を録画し、友達と視聴しアドバイスをもらう」について

この方法は、アとイの良いところを取り入れた方法であり、一人一台端末になったからこそ、時間的なロスがなく取り組める方法であるといえる。自己のペースで撮影した画像を、友達と見合うことは、学級に一台または班に一台端末では、待ち時間が発生し、時間的なロスが大きかったことが実情である。一人一台端末だからこそ実現可能になった方法のひとつではないだろうか。

この方法の良さは、アで言われたような友達からのアドバイスをもらえることに代表される、友達との関わりの中で学ぶことができることである。また、

自己の映像を視聴することで、客観的に分析をする自己フィードバック法の良さも取り入れている。

他方、友達と一緒に取り組むことで、自己の練習量が少なくなることや実際の発表とは異なる環境での撮影になるため、本番に不安を抱える児童がいる。

②複式学級における効果的な指導について

A 取り組みやすさ、手軽さについて

本アンケートにおいて、イの方法を半分の児童が選択した。これは、記述から、自分のペースで何度も練習できるところによさを感じており、ICT 機器があれば、1人で行うことができるところに手軽さを感じていることが伺える。

アについては、早く簡単にすぐ行うことができる反面、自分の表現を聞き取ることのできないことに対してデメリットを感じている。

ウについては、友達とかかわることは、裏を返せば、友達の状況や時間等を確認したうえで行うため、手軽に取り組むやすいことにはつながらなかった。

B 表現力の高まりについて

本アンケートにおいて、ウの方法を半分の児童が選択した。記述からは、相手の考えを取り入れたり相談したり、自分では気が付くことができない表現を学ぶことができることに良さを感じている。児童にとって、外国語は、未知の言語であるため、1人では不安を感じることが多い。その際に、仲間からアドバイスをもらったり、聴いてもらって自信をつけたりすることは何よりの動機付けとなる。加えて、自分の映像を自分自身が観ることにより、足りない部分が可視され、具体的な様子として認識することができる。自己の表現を客観視することで、課題を正確に把握し、改善することにつながる。

アについては、アドバイスをもらうことができるが、自分の状態を把握することに難しさを感じている。

イについては、仲間との関わりの中で、自己の表現が高まっていくと考えると、自分だけで取り組む限界を感じていることが伺える。

C 間接指導に適しているものについて

どの方法も、50パーセントには達していなく、

有意差も見られない。ただし、アとイの方法が、間接指導には適していると答えた児童が多い。

アについては、従来から取り組んできた方法であり、児童にとってもなじみが深い方法である。自分たちだけで、簡便に高められることや、話し合うことができることなどによさを感じている。

イについては、間接指導における一人学びと重なる。自分のペースで学びを進められることや、自分の映像を繰り返し撮影し修正することができることなどによさを感じている。

上記 2 つについては、間接指導の短い時間で課題を解決を図るためのシンプルな道筋が感じられる。ICT 機器を介した、一人学びと、ICT 機器を介さないフィジカルな学びである。

ウは、ICT 機器を用いたフィジカルな学びとすることができる。2 つの要素が組み込まれているために、間接指導には向いていないととらえた児童が多かったように見受けられる。

③ 3つの方法から考える間接指導について

前述から、複式学級における間接指導に適した、ICT 機器の活用について、1 つに絞って有効な方法を明らかにするより、指導場面に沿って有効であろう方法を選んで取り入れていく方が、子供の学びを充実させることが示唆された。

間接指導における ICT 機器の活用では、自己の映像を撮影することについて肯定的であるが、撮影した映像を個人で視聴し、分析する方法と友達と視聴して分析する方法では、それぞれの用途が違うと考える。

例えば、前者の良さはじっくりと自己の表現と向きあうことである。そのためには、ある程度の表現に関わる知識及び技能を有していなければならないため、単元の中盤位で自己の習熟を図る場面では効果的である。

他方、後者では仲間と関わる複式学級の良さが担保されつつも自己の成長も促すことができる。この場合、単元前半で表現に必要な知識及び技能を発見したり、検討したりする際や、単元後半の発表会目前で最後の習熟を図る際に有効である。

後者の類似の方法である、アは従来でも効果を上

げているが、ICT 機器の活用の側面から見ると、自己の映像を自分で視聴して分析することができない面において、発表における話すことには充足できない面も伺える。

つまり、ICT 機器を用いた間接指導では、児童の実態に応じた可変的な使用が大前提となり、そのなかでも、児童の学びにおいて、流動的な運用が望まれることわかった。

5. まとめ

本研究では、次のことが示唆された。

- ① 複式学級における間接指導では、ICT 機器は児童の学びを促進する。
- ② 複式学級に外国語科における間接指導では、ICT 機器を用いた自己フィードバック法は単位時間の中盤において、その単元で学ばせたい知識及び技能が身についた状態で行うことにより、安心して英語運用を行うことができる。自己映像を仲間と見合うハイブリット型は、単元の前半や終盤に用いることで、児童が発表の際に安心して取り組めることが示唆された。
- ③ 間接指導の中でも、児童は、仲間と関わりながら学ぶことに複式指導の良さを捉えているため、ICT 機器を介しながら関わるような手立てを講じる必要がある。
- ④ 自己の成長については、正しく判断する事が難しい児童もいるが、それは方法による違いではなく、児童のメタ認知能力に起因することが伺えた。

謝辞

本研究を行うにあたり、岩手大学教育学部附属小学校 5・6 年かつら組の皆さんに大きな感謝を述べたい。被験者として、大変な苦勞をかけながらも、笑顔でとりくんでいたことが印象的である。

解説引用文献

文部科学省小学校学習指導要領（平成 29 年告示）
外国語編，東洋館出版社
国立教育政策研究所（2020）「指導と評価の一体化」
のための学習評価に関する参考資料（小学校外国語）